九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

大学生における自閉スペクトラム症特性がアイデンティティの確立に与える影響 ： 関係性に着目して

上田, 綾香
九州大学大学院人間環境学府

田中, 真理
九州大学

五十嵐, 友里
東京家政大学

https://doi.org/10.15017/4372199

出版情報：九州大学心理学研究. 22, pp.11-20, 2021-03-15. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

Kyushu University Psychological Research
2021, Vol.22, 11-20

大学生における自閉スペクトラム症特性がアイデンティティの確立に与える影響
── 関係性に着目して ──

上田　綾香　九州大学大学院　人間環境学府
田中　真理　九州大学
五十嵐友里　東京家政大学

Effects of Autism Spectrum Disorder traits on identity establishment amang university students: Focus on relationships

Ayaka Ueda（*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*）
Mari Tanaka（*Kyushu University*）
Yuri Igarashi（*Tokyo Kasei University*）

This study examines the impacts of the traits of Autism Spectrum Disorder（ASD）on relatedness- and individual-based identities among university students.A total of 116 students completed scales on autism spectrum quotient（AQ）, relatedness-based identity, and individual-based identity.The study results of an unpaired t-test and multiple regression analysis indicated that the high-AQ group had significantly lower scores than the low-AQ group for relatedness-based identity and individual-based identity. Low values for social skills and communication on the AQ in particular had a significantly negative impact on relatedness-based identity and social skills within individual-based identity; these results suggest that students with relatively strong ASD characteristics face challenges in establishing both relatedness- and individual-based identities. In particular, the difficulty in establishing relatedness-based identity may be affected by inability to connect with others and being easily misled by other's words and unique speaking style.

Key words: Autism Spectrum Disorder, Relatedness-based identity, Relationship, University student

問題と目的

はじめに

自閉スペクトラム症[1)]（Autism Spectrum Disorder; 以下，ASD）とは，社会的コミュニケーションや社会的相互作用における持続的な欠陥と，限定された反復的行動，興味，または生活の様式によって特徴づけられる障害である（American Psychiatric Association; 以下，APA, 2013 高橋・大野訳 2014）。筆者はこれまでに，障害の告知を受けていないが，学習やソーシャルスキルトレーニングなどの支援を受けている思春期の ASD 者との出会いがあった。その当事者は自分の障害のことを知らないものの，「なぜ自分が支援を受けているのか」「自分は周りとは何が違うのか」などの漠然とした疑問を抱いていた。これは他の障害種とは異なり，ASD の障害特性が自覚し難く（佐藤・徳永，2006），ASD であることを自分で理解しないまま特別な配慮や支援を受ける経験が多い（田中・廣澤・滝吉・山崎，2006）ために，生じる疑問であると考えられる。筆者はこのことを受け，ASD 特性があることへの気付きや疑問から，彼ら自身が「発達障害」「ASD」である「自分」をどのように理解し，自分の人生に位置づけていくのか，という疑問を抱いた。この「『発達障害』『ASD』である『自分』」とは，ASD 者の「アイデンティティ」として捉えることが可能である。ASD 者は，上記のような障害の特徴から，他者との差異や支援を受ける意味を否定的に捉えてしまう可能性が考えられ，それはアイデンティティにも影響することが推測される。したがって，上述した疑問を検討することは，アイデンティティの確立や自己理解を深めるための支援を考える上で重要であると考えられる。以上のような着想から，本研究ではASD者のアイデンティティについて先行研究を概観した上で，アイデンティティに関して ASD 者が直面する課題に着目し，検討を行うこととする。

[1)] Autism Spectrum Disorder は，Diagnostic and Statistical manual of Mental disorders, 5th edition（DSM-5; APA, 2013）での邦訳として「自閉スペクトラム症／自閉症スペクトラム障害」という名称が用いられている。ASD は，健常者と自閉性障害者との間に症状の量的なスペクトラムを仮定されているため，DSM-5 への改訂以降，「障害」という表現はされない傾向にある。本研究でもその傾向に則り，「自閉スペクトラム症」を用いる。

大学における自閉スペクトラム症

2000年以降，以下3つの法整備により，大学[2]における発達障害に注目が集まってきている。1つ目は，2005年の発達障害者支援法の施行で，発達障害に対して円滑な社会生活を促進するために，医療，福祉及び教育における早期の発達支援や，切れ目のない支援を行うことが，国及び地方公共団体の責務とされた。これにより，施行以前では明確な支援対象とされてこなかった発達障害が，法規定上，正式に対象とされるようになった。2つ目は，2011年の障害者基本法の改正であり，障害者の定義に発達障害が含まれ，発達障害者における自立や社会参加の支援策についての，国及び地方公共団体等の責務が明確にされた。3つ目は，2016年の障害者差別解消法の施行であり，行政機関や民間事業者に対し，障害者の差別的取り扱いの禁止と合理的配慮の不提供の禁止が法的義務あるいは努力義務とされた。以上により，大学でも発達障害がより認知されるようになってきた。

日本学生支援機構（2020）の調査によると，「大学に対して支援を申し出ることで，大学から何らかの支援を受けている学生のうち，発達障害の診断がある，または診断はないが発達障害であることが推察されている学生」（以下，支援発達障害学生[3]）は7844人である。これは，診断はなく発達障害であると推定され支援を受ける学生（以下，診断のない支援発達障害学生）が調査対象に含まれ始めた2008年の814人から，約9.6倍の増加を示す。このような全体数の増加傾向に対し，石井・篠田（2014）は支援発達障害学生の中でも特に，診断のない支援発達障害学生数の増加傾向を指摘しており，実際に2008年の515人から2020年の2854人と，約5.5倍増加が認められている。以上より，大学において，診断の有無に関わらず発達障害特性のある学生への支援がより求められていると言える。

特に，診断のない支援発達障害学生のうち49.5％（1414人）の学生はASDと推定されている（日本学生支援機構，2020）。佐藤・徳永（2006）は，発達障害のある学生の相談状況の調査から，高機能自閉症者が大学で直面する主な課題として，対人関係のトラブルや不適切な行動，学業上の問題を挙げている。これらは，大学がそれまでの教育機関と比較して教育の構造化が低く，学生には能動的に情報を収集して臨機応変に対応するスキルが求められる（高岡・藤尾・野中・松田・下山，2012）がゆえに，生じると考えられる。そのため，特に診断がなくASD特性が強い学生は，大学でこれらの課題に直面して初めて発達障害が疑われることが多い（福田，2008）。したがって，自分の特性の理解がないまま，障害に直面しやすい学生にとって，自己理解のための支援が喫緊の課題であると言える。

このような課題に対応するために，本研究ではアイデンティティに着目する。以下では，大学生におけるアイデンティティについて概観する。

青年期における課題―アイデンティティ確立と関係性の視点―

Erikson（1959）によると，アイデンティティの確立は青年期における心理社会的発達課題である。アイデンティティの感覚とは「内的な斉一性（sameness）と連続性（continuity）を維持しようとする各個人の能力が，他者に対しての自己の意味の斉一性と連続性とが一致した時に生じる自信」である（Erikson，1959）。斉一性とは，空間が変化しても自分が自分であるという一貫性がある感覚であり，連続性は時間が変化しても自分が自分であるという時間的に連続した感覚を意味する（谷，2001）。つまり，アイデンティティの確立とは，空間や時間の変化の中で“自分が自分である”という確信をもっており，そのような自分が社会の中で様々な位置づけられ方をしても揺るがないこと，そのような認識を自らが持つとともに，それが周囲からも保障されていること（山田・岡本，2007）と言える。本研究では，これらの感覚を持った状態を「アイデンティティの確立」と捉えることとする。このアイデンティティの確立のために，青年はアイデンティティの危機（crisis）を経験する（Erikson，1968）。アイデンティティの危機とは，自分が親から分離した個性ある存在となるために，児童期までの親との関わりなどの中で獲得してきた様々な価値観や自己の社会的役割を再吟味する過程のことである（平石，1994）。このように，我々は危機を経験していく上で，これまでの価値観や社会的役割の選択肢について考え直し，他者と議論や情報収集をしたり，様々な社会的役割を試したりすることを通して，アイデンティティを確立していくのである。

以上のようなアイデンティティの概念は，Marcia（1966）によるアイデンティティ・ステータスの研究をはじめ，多くの研究者によって取り上げられた。アイデンティティ・ステータスとは，上記のようなアイデンティティの「危機」と，自己決定したものに対する自己の投入の在り方を表す「コミットメント（commitment）」の2つの側面から，個人のアイデンティティの在り方を判定する理論である。この理論により，Eriksonのアイデンティティの概念を具体的に把握するための明確な観点が提供された。

さらに，アイデンティティの性差についての主張も現

[2] 本研究では，高等教育機関である大学，短期大学，高等専門学校を総括して「大学」と表記する。

[3]「支援発達障害学生」という用語は日本学生支援機構の表現に則ったものである。ここでは，支援の有無に限らず発達障害に関する医師の診断書がある「発達障害学生」とは区別される。

れ，女性に特徴的とされた他者との「関係性」が，アイデンティティにおける観点として注目されるようになってきた。杉村（1998）によると，Marcia（1966）が職業，政治，宗教といった，男性に偏った領域のアイデンティティを扱っていたことへの批判から，女性のアイデンティティにおいては他者との親密な関係を結ぶという対人関係領域が重要であるという主張がなされ（例えばGilligan，1982），男女二分法的な理解がされるようになった。つまり，女性は重要な他者とのつながりを維持し，その中で葛藤に直面することを通して自己を確立していくという，他者との関係の中での個性化のプロセスが示されたと言える（山田・岡本，2007）。しかし，近年の女性を取り巻く社会状況や性に関する価値観の変動により，対人関係領域は性別を超えた人間共通のアイデンティティに関わる領域となってきた。これにより，他者からの分離や自立に注目する従来のアイデンティティのパラダイムから，他者との結びつきを考慮に入れたパラダイムへと転換され（杉村，1998），アイデンティティにおける「関係性」の視点が注目されるようになった。

以上のような過程から，従来の個に着目するアイデンティティ，すなわち「個としてのアイデンティティ（以下，個Id）」に加え，「関係性」に着目するアイデンティティ，つまり「関係性に基づくアイデンティティ（以下，関係性Id）」が導入されるようになってきた（岡本，1997）。このような，アイデンティティを2つの視点から捉え直す試みは，Franz & White（1985）がアイデンティティを「個性化経路（Individual Pathway）」と「愛着経路（Attachment Pathway）」の2つの経路モデルで説明したことに始まる。Franz & White（1985）は，Eriksonの心理社会的発達理論において，個性化の過程だけでなく対人愛着の発達の過程が適切に説明される必要があるとし，このモデルを提唱している。「個性化経路」はEriksonの発達理論に基づき，個人が個としての存在を確立し，社会的にも自立していく筋道を示している。一方で「愛着経路」は，他者との相互関係を円滑に進めることが可能になる筋道を示している（Franz & White，1985; 山田・岡本，2007）。これらの経路モデルに基づいた山田・岡本（2008a）の定義と，個Idと関係性Idの尺度（山田・岡本，2008a; 2008b: 後述）の構成因子を参考にし，本研究では，個Idを「自己の能力に対する信頼感を基盤に，将来を展望し，自律した個人としてのアイデンティティの側面」とし，関係性Idを，「自己を取り巻く世界への信頼感を基盤に，他者との関係の中で自己の存在が脅かされず，不必要に孤独感を抱かない個人としてのアイデンティティの側面」と定義する。これらは，両者が共に確立されていることが，不安の低さや自尊感情の高さに関連するために望ましいとされる（山田・岡本，2008a）。したがって，両者が確立された状態が，上述したアイデンティティの確立の状態に相当するものとする。

以上より，個Idだけでなく関係性Idに着目することは，近年のアイデンティティの捉え方に沿った重要な視点であることが言える。

ASD特性と関係性に基づくアイデンティティ

アイデンティティは，自己理解と密接な関連があると考えられる。先行研究においても，ASD者の自己理解の研究が中心として行われてきた。例えば滝吉・田中（2011）は，思春期・青年期の広汎性発達障害者の自己理解の仕方について調査し，彼らが自己の人格特性という内的な自己理解より，自己の身体や所属，典型的な行動や興味対象などの外的な自己理解をする傾向にあることや，相互的な関係性の中で自己を否定的に捉えるが，そうでない場合は肯定的に捉える傾向にあることを示唆している。また，高岡（2017）は，高機能自閉症者が他者の言動をモニタリングすることによって自己理解を促進させるとし，その力を育む機会を増やすことが重要としている。このように，ASD者の自己理解の特徴は明らかになりつつある。

一方，アイデンティティについての研究は，PsycINFOデータベース（ASD and Identity Crisis ／ Identity Formation ／ Cultural, Social, Ego, Group Identity）で検索すると47件であった。内容は主にASD者のアイデンティティの状態が精神的健康度や自尊心等に及ぼす影響を検討したもの（ex. Cooper, Smith & Russell, 2017; Cresswell & Cage, 2019）や，アイデンティティの状態の変遷を追うもの（ex. Smith & Jones, 2020）などであるが，ASD特性とアイデンティティ確立の関連について検討した研究は，Ratner & Berman（2015）のみである。この研究では，一般大学生に対し質問紙調査を行い，ASD特性とアイデンティティの探索，危機の間に正の関連が，アイデンティティのコミットメントとの間に負の関連があることを示唆している。しかし，具体的にどの特性が影響するかについての検討や，ASDに特徴的とされる「関係性」を考慮した検討は行われていない。上記の通りアイデンティティにおいても，他者との「関係性」を考慮することは重要であるため，本研究ではASD特性がアイデンティティに与える影響について，「関係性」を考慮に入れて検討する。

ASD特性には，社会的コミュニケーションの障害と，限定された反復的な行動様式がある（APA, 2013）が，特に他者との関係性の中で生じる社会的コミュニケーションの障害によって，以下3点のような状態像に直面することが考えられる。そして，それらの状態像が関係性Idの確立に影響を与えることが推測される。

1点目に，幼少期における愛着形成について，ASD児

には愛着の形成に特異性が存在しやすいこと（伊藤，2002）が挙げられる。ASD 児は，人よりもモノに対して愛着が優先しやすいことや，母親を心的支えとして求めるのではなく，要求充足のための道具的な対象としている可能性があると指摘されている。関係性 Id の確立は上記の通り，周囲への信頼感に始まるとされ，山田・岡本（2008a）はその信頼感を「自己を取り巻く世界に対する基本的信頼感」と表している。基本的信頼感は母親との関係の質，つまり幼児期の愛着形成に大きく依存する（Erikson, 1968）ため，幼児期の愛着に特異性があった者は，「自己を取り巻く世界に対する基本的信頼感」の確立にも特異性がある可能性が考えられる。

2 点目として，自己喪失の危機に陥りやすいことが挙げられる。これは ASD 特有の，外的刺激の侵入のしやすさ（佐藤・櫻井，2010）が影響していると考えられる。この外的刺激の侵入は対人関係の中でも見られ，他者が「自分」に侵食してくるような不安から自分の主張がし難くなり，他者と共にある中での「自分」の存在が分からなくなる，つまり自己を喪失する危機に陥りやすい（木谷，2015; 佐藤・櫻井，2010）。山田・岡本（2008a）は，関係性 Id の確立のために，他者との関係の中で他者の存在に自己の存在が脅かされないこと，つまり自分を見失わず他者と関われることが重要であるとしている。したがって，自己喪失の危機に陥りやすい ASD 特性の強い者にとっては，それが困難であることが考えられる。

3 点目は，ASD 者の孤独感の抱きやすさである。理由として，ASD 者は上記のような社会的コミュニケーションの障害により，対人関係上の問題に陥りやすいからである。特に，いじめの危険に晒される可能性が高く（DeNigiris, Broocks, Obeid, Alarcon, Shane-Smpson & Gilespie-Lynch, 2018），周囲から孤立し，自己への否定的な想いを深めやすい傾向にあることも指摘されている（滝吉・田中，2011）。山田・岡本（2008b）は，関係性 Id の確立を考える際に，他者との関係の中で不必要に孤独感や疎外感を感じないことが重要であるとしている。このことから，ASD 特性が強いことで，関係性 Id の確立を妨げるような孤立経験をしやすくなることが考えられる。

以上の特徴により，ASD 特性の強い者は関係性 Id の確立に困難を抱えることが推測される。したがって，本研究ではアイデンティティの関係性の側面に着目し，大学生における ASD 特性が関係性 Id の確立に与える影響を，個 Id への影響と比較しながら検討していくことを目的とする。なお，本研究では Autism-spectrum Quotient（AQ）を使用して ASD 特性を測るものとする。仮説は以下の通りである。

・仮説 1：AQ 得点の高い者は低い者と比較して，関係性 Id においてのみ，得点が低い。

・仮説 2：AQ の因子のうち「社会的スキル」と「コミュニケーション」が関係性 Id に負の影響を与える。

方　法

調査対象者

国内の大学生 116 名（男性 30 名，女性 86 名，平均年齢 20.28 歳，*SD* = 1.43）が調査に参加した。本研究はインターネット調査であり，回答に不備がないことが回答の送信条件であったため，有効回答率は 100.0%であった。

調査時期

2019 年 10 月に調査を実施した。

調査内容

本研究はインターネット調査法で実施した。質問紙は以下の通りである。

フェイスシート　学年・年齢・性別の記入を求めた。

自閉症スペクトラム指数（AQ）日本語版　ASD 傾向を測定するために，自閉症スペクトラム指数（Autism-spectrum Quotient: 以下，AQ とする）日本語版（若林・東條・Baron-Cohen・Wheelwright）を用いた。AQ は「社会的スキル」「注意の切り替え」「細部への注意」「コミュニケーション」「想像力」の 5 因子 50 項目から構成されている。各項目について，「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」の 4 件法で回答を求め，各項目の ASD 特性を示すとされる側に「あてはまる」または「どちらかといえばあてはまる」（逆転項目では，「あてはまらない」または「どちらかといえばあてはまらない」）と回答した場合に 1 点を与えた（得点可能範囲は 0-50）。

個としてのアイデンティティ尺度　アイデンティティを「個」の側面から見るために，個としてのアイデンティティ尺度（山田・岡本，2008a）を用いた。「自己への信頼感・効力感」「将来展望」「自律性」の 3 因子 15 項目から成り，各項目について，「非常にあてはまる」「割とあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の 4 件法で回答を求めた（得点可能範囲は 15-60 点）。得点が高いと個 Id の確立の度合いが高いことを示す（付録 1）。

関係性に基づくアイデンティティ尺度　アイデンティティを「関係性」の側面から見るために，関係性に基づくアイデンティティ尺度（山田・岡本，2008b）を用い

た。「自己を取り巻く世界への信頼感と関係性の価値付け」「関係の中での自己の定位」「見捨てられ不安」の 3 因子 13 項目から成り，各項目について，「非常にあてはまる」「割とあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の 4 件法で回答を求めた（得点可能範囲は 13-52 点）。得点が高いと「関係性としてのアイデンティティ」の確立の度合いが高いことを示す（付録 2）。

手続き

本調査はインターネット調査法で実施された。著者が所属していた学生ボランティア団体または著者が所属していた大学の在学生に対しインターネット上で個別配布形式を利用した。調査対象者は，フェイスシート，AQ，個尺度，関係性尺度の順で質問紙に回答した。

分析方法

仮説 1 の検証に先立ち，AQ 得点を高群と低群に分類した。本研究では一般大学生を対象とした限られたデータを扱うため，カットオフポイント（33 点）で分類することは適切ではないと判断した。また，ASD は症状の量的なスペクトラムを仮定する概念であるため，基準となる平均値に加え，標準偏差（*SD*）を考慮に入れた分類が適切であると考えられた。したがって，AQ 得点の平均値 ±0.5*SD* を基準に，AQ 高群（AQ 平均 = 27.75, *SD* = 3.34，*n* = 40，男性 *n* = 11，女性 *n* = 29）と AQ 低群（AQ 平均 = 14.48，*SD* = 2.12，*n* = 42，男性 *n* = 12，女性 *n* = 30）に分類し，対応のない *t* 検定を実施した。その際，独立変数間の等分散を仮定し，*F* 値が有意でないことを確認した。*F* 値が有意の場合は，Welch の *t* 検定を実施した。また，仮説 2 の検証のために，強制投入法を採用した重回帰分析を実施した。これらの統計には，IBM SPSS Statistics ver.26 を使用した。

倫理的配慮

調査に先立ち，学生ボランティア団体の代表の学生 2 名に対し研究協力依頼状を用いて，①研究の内容，②目的，③無記名調査でありプライバシーが守られる形で回答を処理すること，④協力を断っても不利益が生じないこと，⑤データは責任をもって管理すること，⑥調査からは自由に離脱が可能であること，を十分に説明し，調査協力の同意を得た。その他の学生に対しては，上記のことを調査の際に伝え，回答を送信したことによって調査への同意を得られたとした。また，本調査は「特性に関する調査」であることを説明し，大学内での研究発表を以て事後説明とした。

結　果

記述統計量

質問紙の回答に欠損のない 116 名（男性 *n* = 30，平均年齢 21.33 歳，*SD* = 1.19; 女性 *n* = 86，平均年齢 19.93 歳，*SD* = 1.33）を分析対象とし，統計量を算出した（Table 1）。AQ のカットオフ値（33 点）以上であった者は 5 名（約 4%）であった。

Table 1
年齢及び各尺度の平均値と標準偏差

		年齢	AQ	個 Id	関係性 Id
男性（*n*=30）	平均値	21.33	20.93	38.80	37.77
	SD	(1.19)	(6.73)	(7.57)	(5.39)
女性（*n*=86）	平均値	19.93	20.73	37.35	37.43
	SD	(1.33)	(5.86)	(6.80)	(5.61)
全体（*n*=116）	平均値	20.28	20.78	37.72	37.52
	SD	(1.47)	(6.14)	(7.06)	(5.58)

尺度の信頼性

個 Id 尺度及び関係性 Id 尺度については，標準化されていない尺度であったため，信頼性の検討を行うために Cronbach の α 係数を算出した。その結果，個 Id 尺度は α = .85，関係性 Id 尺度は α = .81 であった。これらは山田・岡本（2008a; 2008b）における数値とほぼ同等であったため，一定の信頼性を有すると判断した。なお，本研究では，ASD 特性が個 Id 全体と関係性 Id 全体に与える影響について検討することを目的としていたため，因子分析による検討は行わなかった。

また，山田・岡本（2008a）は，尺度を作成する際に，個 Id 尺度と関係性 Id 尺度同士の関連を検討している。それに倣い，Pearson の相関係数を算出したところ，尺度間に有意な相関が得られ（r = .57，p < .01），山田・岡本（2008a）と同様の結果となることを確認した。

ASD 特性による個 Id と関係性 Id への影響

仮説 1 を検討するために，AQ 高群・低群を独立変数，個 Id 得点と関係性 Id 得点それぞれを従属変数とした，対応のない *t* 検定を実施した。その結果，個 Id 得点と関係性 Id 得点の両方において，AQ 高群（個 Id = 34.18，*SD* = 6.23; 関係性 Id = 33.08，*SD* = 4.58）と AQ 低群（個 Id = 40.36，*SD* = 6.35; 関係性 Id = 40.79，*SD* = 4.35）の間で有意差があり，AQ 高群の方が AQ 低群よりも，両得点が有意に低いことが示された（順に，t = 4.45, p < .001，t = 7.81，p < .001；Fig.1）。

社会的スキルとコミュニケーションが関係性 Id に与える影響

仮説 2 を検証するために，「AQ 各下位因子」を独立

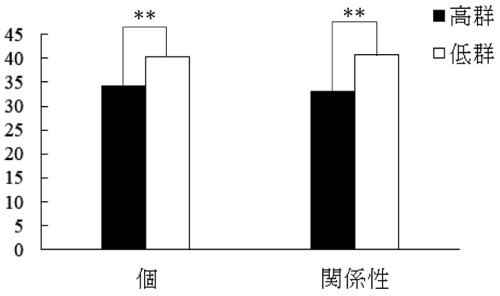

Fig.1
個Id得点と関係性Id得点におけるAQ高群・低群の得点比較。
Note. ** $p < .001$

変数，「個 Id 得点」と「関係性 Id 得点」をそれぞれ従属変数とした重回帰分析を実施した（Table 2）。その結果，関係性 Id に対しては，「社会的スキル」と「コミュニケーション」において有意な負の影響がみられた（順に $\beta = -.23$，$p < .05$; $\beta = -.46$，$p < .01$）。また，個 Id に対しては，「社会的スキル」のみが有意な負の影響を示していた（$\beta = -.35$，$p < .01$）。

考　　察

以上より，ASD 特性が相対的に強い者は弱い者と比較して，関係性 Id と個 Id の両方で有意に得点が低かった（仮説 1）。また，関係性 Id に対しては「社会的スキル」と「コミュニケーション」が有意な影響を与えていた（仮説 2）。以下では，各仮説の結果について考察する。

ASD 特性による個 Id と関係性 Id への影響

結果から，仮説 1 は支持されなかった。つまり，ASD 特性が相対的に強い者は低い者と比較して，関係性 Id だけでなく個 Id においても確立に困難を示すことが示唆された。このことから，ASD 特性が相対的に強い者は，空間や時間の変化の中で“自分が自分である”という確信と，そのような自分が社会の中で様々な位置づけられ方をしても揺るがないこと，その認識を自らが持つと同時に周囲からも保障されているという，アイデンティティの確立の感覚を抱きにくいことが考えられた。このような確立の困難に対して，具体的にどのような特性が影響しているのかについて，以下の節で考察する。

社会的スキルとコミュニケーションが関係性 Id に与える影響

結果より，仮説 2 は支持された。つまり，AQ 因子の中でも，特に「社会的スキル」と「コミュニケーション」が関係性 Id に有意に影響しており，ASD 特性の「社会的コミュニケーションや社会的相互作用における持続的な欠陥」（APA, 2013）が，関係性 Id の確立の困難に対する要因の一つであることが示唆された。一方，個 Id に対しても「社会的スキル」は影響していたが，「コミュニケーション」の影響は見られなかった。このことから，ASD の社会的スキルの特性は関係性 Id と個 Id の両方に影響するが，コミュニケーションの特性は，関係性 Id に対してのみ特異的に強く影響する因子であると推測された。

AQ のコミュニケーション因子には，会話を通した他者との繋がれなさや（ex.「他の人と，雑談などのような社交的な会話を楽しむことができる（逆転項目）」），会話の中で相手の言葉に惑わされやすいこと（ex.「冗談がわからないことがよくある」），話し方の独特さ（ex.「自分ではていねいに話したつもりでも，話し方が失礼だと周囲の人に言われることがよくある」），等の要素が含まれる。以下では，これらの要素が関係性 Id に与える影響について考察する。

Table 2
AQ 各下位因子を独立変数
関係性 Id 得点及び個 Id 得点を従属変数とした重回帰分析

				95% 信頼区間		
		B	*β*	下限	上限	R^2
関係性 Id	社会的スキル	−.51	−.23 *	−1.59	−.38	
	注意の切り替え	−.40	−.12	−.90	.62	
	細部への注意	−.35	−.14 †	−.21	.85	.45 **
	コミュニケーション	−1.21	−.46 **	−1.35	.16	
	想像力	.15	.04	−.63	.89	
個 Id	社会的スキル	−.98	−.35 **	−.92	−.10	
	注意の切り替え	−.14	−.03	−.91	.12	
	細部への注意	.32	.10	−.71	.01	.26 **
	コミュニケーション	−.59	−.18	−1.72	−.70	
	想像力	.13	.03	−.37	.66	

Note. **p<.01, *p<.05, †p<.10

まず，「会話を通した他者との繋がれなさ」について，木谷（2015）は，ASD者が他者と言葉やイメージを共有しづらいことや，他者が醸し出す雰囲気から気持ちを察することの困難さから，他者と自分の考えや思いを理解し合ったり共有し合ったりするという「分かち合う関係」が築かれにくい，としている。このようなコミュニケーションを通した他者との繋がれなさは，関係性Id尺度の，人間関係が築けていることが前提とされる内容（ex.「これまで私が築いてきた人間関係は，私にとって価値がある」「友人関係は，比較的安定している」）や，自分が孤立した感覚（ex.「私は（中略）一人ぼっちであるように感じる（逆転項目）」）などに影響していると考えられる。

また，「会話の中で相手の言葉に戸惑わされやすいこと」について，高岡（2017）は，高機能自閉症者が他者の表情や言葉などを同時に理解することが難しく，言われた言葉だけを真に受け止めることなどにより，他者から攻撃を受けたり親密な交流を拒まれるといった，対人トラブルに発展しやすいとしている。これは，「話し方の独特さ」についても同様で，ASD者は，会話の中で無遠慮な発言をしてしまったり，自分の意見を押し通そうとすることによって，対人トラブルに発展しやすいとされる（高岡，2017）。こういった対人トラブルの生じやすさは，佐藤・徳永（2006）が調査研究で示した，ASD者もしくはASDと疑われる学生が寄せる相談内容の中で「対人トラブル」が最も多い，という点からも裏付けられる。これらから，ASD者はコミュニケーションの特性から生じる対人トラブルにより，他者への信頼感の構築（ex.「周囲の人々によって自分が支えられていると感じる」）や，他者関係の中で不安を抱くこと（ex.「私は人から見捨てられたのではないかと心配になることがある（逆転項目）」「（前略）他の人が私の考えに同意しないのではと思うと，自分の意見を主張するのをためらう」）などに，影響を及ぼしやすくなると考えられる。

以上のようなコミュニケーションの特性により，ASD特性が相対的に強い学生は，コミュニケーションを通して，周囲への信頼感を基盤に他者との間で自己の存在が確信でき，孤独感から解放された状態といった，関係性Idの確立が困難になることが推測された。大学では，ゼミナールやディスカッションを中心とした授業，就職活動等，他者との積極的なコミュニケーションを求められる機会が増える。特に，診断はないがASD特性が強い学生にとっては，自分の特性を認識する機会がなければ，コミュニケーションの齟齬から生じる対人トラブルや，修学・就職活動中に生じる問題の原因をASD特性に帰属しづらいことが推察される。それゆえに，「できない自分」「ダメな自分」など，原因を自分自身へと帰属することで，自己肯定感の低下をさらに強めたり，社交不安を強化したりし，他者とのコミュニケーションの機会自体を回避しやすくなる傾向にある（木谷，2016; 高岡，2017）。あるいは，コミュニケーションの問題の背景にある，他者の思考の分からなさや状況の曖昧さの原因を他者へ帰属することで，他者を敵視することもあり（木谷，2016），さらなるトラブルへ繋がる可能性も考えられる。このような状態は，結果的に関係性Idの確立をさらに困難にさせるといった，悪循環に陥ると推測される。したがって，このような状態へ陥ることを避けるべく，コミュニケーションに対する介入が重要であることが考えられた。

アイデンティティ領域同士の関連

個Idについて，ASD特性から受ける影響は，関係性Idと比較して「社会的スキル」のみであるため小さいが，確立の度合いの平均値に大きな差は見られなかった。これは，関係性Idと個Idの尺度間相関を踏まえると，関係性Idと個Idの確立の困難さが互いに連動している可能性も考えられた。本研究では両者を別の特質を持つ発達経路として扱っていたが，山田・岡本（2008a）は，青年期においては両者が完全に分離し得ず，相補的な関係にあることを指摘している。これは，ケア役割や社会的役割など，主要な役割がはっきりとしている成人期（岡本，1997）と異なり，青年期では特に大学生において役割が一定でないからである（山田・岡本，2008a）。したがって，ASD特性が相対的に強い学生においても，個Idと関係性Idは独立してはいるが，相互に影響を及ぼし合う関係にあることが考えられる。つまり，そのような関係によって，関係性Idの確立の困難が個Idの確立の困難に対して，二次的に影響を与えている可能性が考えられるのである。

まとめと今後の課題

以上より，ASD特性が相対的に強い大学生のアイデンティティについて考える際には，「関係性」の側面への着目が重要であるが，「個」の側面も視野に入れる必要があることが示唆された。特に，関係性Idの確立への支援として，彼らが他者と繋がるための機会やコミュニティの提供が有用であると考えられた。一方，本研究で扱ったASD特性は，AQを用いた自己評価のみで測定したものであった。本研究の冒頭で述べた通り，ASDは障害特性が自覚しづらい（佐藤・徳永，2006）という特徴もあるため，診断がなくASD特性が強い学生にとっては，自己評価のみで正確なASD特性を測定することは困難であると考えられた。したがって，今回得られた結果は，限定的なデータ収集法に基づく結果ということを，念頭に置く必要があると言える。

また，今後の課題として，主に2点挙げられる。1点

目は，ASD 特性同士の関連や，アイデンティティ確立の困難への過程の詳細を検討することである。本研究では，ASD 特性からアイデンティティの確立への直接的な関係しか検討できていない。考察で触れた通り，ASD 特性からアイデンティティの確立への道筋は様々であることが想定されるため，共分散構造分析といった分析法や質的な調査などを用いて，詳細を検討する必要がある。

2 点目は，ASD 特性の強い者の，アイデンティティ確立の「促進」について検討することが挙げられる。本研究では，アイデンティティ確立の「困難さ」に焦点を当てて検討を行った。しかし，ASD 特性の強い者のアイデンティティは，確立が困難なだけでないことも推測される。本稿の冒頭で述べた通り，滝吉・田中（2011）は，広汎性発達障害者が他者との関係性を含めない中では自己を肯定的に捉える傾向にあり，障害特有の自分の能力への評価を含む行動（能力評価）や嗜好・興味・欲求（注意関心）に則した自己理解をする場合，他者との関係性が考慮されない傾向にあることを示している。つまり，自分の能力評価や注意関心が，広汎性発達障害者が自己を肯定的に理解し自尊感情を維持するために重要と考えられるのである。さらに，愛着形成を通して確立される基本的信頼感はアイデンティティの基盤となるが，伊藤（2002）が指摘した通り ASD 児の愛着形成には特異性がある。これらから，ASD 特性の強い者にとってアイデンティティ確立の困難さだけでなく，他者との関係性に基づかない ASD 独自のアイデンティティや確立の促進要因となるものが存在することも推測される。

今後は，アイデンティティの関係性の側面と，個の側面の両方を考慮した上で，上記のような課題を踏まえ，さらなる検討を行う必要がある。そうすることで，ASD 者あるいは ASD 特性の強い者の自己への理解を深めるための支援についても，さらに考えることができるだろう。

〈謝辞〉

本論文は，筆者が 2019 年度に提出した卒業論文を加筆・修正したものです。本論文を作成するにあたり，九州大学及び東京家政大学の先生方，先輩方には，ご多忙にも関わらず終始丁寧なご指導を賜りました。また，本研究の調査実施にあたりましては，学生の皆様に多大なるご協力を賜りました。ここに記して心より感謝申し上げます。

引 用 文 献

American Psychiatric Association（2013）. *Diagnostic and statistical manual of mental disorders, 5th Edition.* American Psychiatric Publishing.（高橋三郎・大野裕（監訳）（2014）. DSM-5　精神疾患の診断・統計マニュアル　東京医学書院）

Cooper, K., Smith, L. G. E. & Russell, A.（2017）. Social identity, self-esteem, and mental health in autism.　*European Journal of Social Psychology*. **47**, 844-854.

Cresswell, L. & Cage, E.（2019）. ‘Who am I?’: An exploratory study of the relationships between Identity, acculturation and mental health in autistic adolescents. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, **49**, 2901-2912.

DeNigris, D., Brooks, P., Obeid, R., Alarcon, M., Shane-Simpson, C. & Gilespie-Lynch, K.（2018）. Bullying and identity development : insights from autistic and non-autistic college students. *Journal of Autism and Developmental Disorders,* **48**, 666-678.

Erikson, E. H.（1959）. Identity and the Life Cycle.　*Psychological Issues.* Vol.1, No.1, Monograph1., International Universities Press.（エリクソン, E. H. 小此木啓吾（訳編）（1973）. 自我同一性―アイデンティティとライフサイクル―　誠信書房）

Erikson, E. H.（1968）. *Identity: Youth and Crisis*. W. W. Norton & Company.（エリクソン, E. H.　岩瀬庸理（訳）（1982）. アイデンティティ―青年と危機―　金沢文庫）

Franz, C. E. & White, K. M.（1985）. Individuation and attachment in personality development : Extending Erikson’s theory. *Journal of Personality*, **53**, 224-256.

福田真也（2008）. 発達障害の大学生に対する大学と医療の連携―診断と告知を中心に―　大学と学生, **60**, 6-15.

Gilligan, C.（1982）. *In a different voice: Psychological theory and women’s development*. Cambridge MA: Harvard University Press.

平石賢二（1994）. 青年期におけるアイデンティティ形成　久世敏雄（編）　現代青年の心理と病理（pp.71-82）　福村出版

伊藤英夫（2002）. 自閉症児のアタッチメントの発達過程　児童青年精神医学とその近接領域, **43**(1), 1-18.

木谷岐子（2015）. 自閉スペクトラム症の成人当事者が抱える「自分」―M-GTA を用いた質的研究―　北海道大学大学院教育学研究院紀要, **122**, 1-25.

石井正博・篠田晴男（2014）. 発達障害のある学生への進路支援の現状と課題―自閉スペクトラム症を中心として―　立正大学心理学研究年報, **5**, 105-112.

Marcia, J. E.（1966）. Development and validation of ego-identity status. *Journal of personality and social psychology,* **3**, 551-558.

日本学生支援機構（2020）. 障害のある学生の修学支援に関する実態調査 https://www.jasso.go.jp/gakusei/

tokubetsu_shien/chosa_kenkyu/chosa/2019.html（2020 年 8 月 23 日）

岡本祐子（1997）．中年からのアイデンティティ発達の心理学　ナカニシヤ出版

Ratner, K. & Berman, S. L.（2015）．The Influence of Autistic Features on identity Development in Emerging Adults. *Emerging Adulthood*, **3**（2）, 136-139.

佐藤克敏・徳永　豊（2006）．高等教育機関における発達障害のある学生に対する支援の現状　特殊教育学会，**44**（3），157-163.

佐藤由宇・櫻井未央（2010）．広汎性発達障害者の自伝に見られる自己の様相　発達心理学研究，**21**（2），147-157.

Smith, O. & Jones, S. C.（2020）．‘Coming out’ with autism: identity in people with an asperger’s diagonosis after DSM-5.　*Journal of Autism and Developmental Disorders*, **50**（2）, 592-602.

杉村和美（1998）．青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し　発達心理学研究，**9**（1），45-55.

高岡佑壮（2017）．高機能自閉種スペクトラム障害を持つ成人が自己理解を深めるプロセスに関する質的研究　臨床心理学，**17**（2），231-242.

高岡佑壮・藤尾未由希・野中舞子・松田なつみ・下山晴彦（2012）．発達障害を有する人への臨床心理学的援助の課題―ライフステージを通した支援を目指して　東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要，**35**，65-72.

谷　冬彦（2001）．青年期における同一性の感覚の構造―多次元自我同一性尺度（MEIS）の作成―　教育心理学研究，**49**，265-273.

滝吉美知香・田中真理（2011）．思春期・青年期の広汎性発達障害者における自己理解　発達心理学研究，**22**（3），215-227.

田中真理・廣澤満之・滝吉美知香・山崎　透（2006）．軽度発達障害児における自己意識の発達―自己への疑問と障害告知の観点から―　東北大学大学院教育学研究科研究年報，**54**（2），431-443.

若林明雄・東條吉邦・Baron-Cohen, S. & Wheelwright, S.（2004）．自閉症スペクトラム指数（AQ）日本語版の標準化―高機能臨床群と健常成人による検討―心理学研究，**75**（1），78-84.

山田みき・岡本祐子（2007）．「個」と「関係性」からみた青年期のアイデンティティに関する研究の動向と展望　広島大学大学院教育学研究科紀要，**56**，199-206.

山田みき・岡本祐子（2008a）．「個」と「関係性」からみた青年期におけるアイデンティティ：対人関係の特徴の分析　発達心理学研究，**19**（2），108-120.

山田みき・岡本祐子（2008b）．「個」と「関係性」概念からのアイデンティティ尺度の作成　広島大学心理学研究，**8**，89-98.

付録 1

個としてのアイデンティティ尺度
第 1 因子「自己への信頼感・効力感」
私は，多くのことに対して自信を持って取り組むことができる
私は，自分が役に立つ人間であると思う
私は，自分が好きだし，自分に誇りを持っている
私は，きっとうまく人生を乗り越えられるであろう
自分の考えに従って行動することに自信を持っている
第 2 因子「将来展望」
将来自分が何をしたいかという確信や目標を持っている
将来の職業（専業主婦も含む）について，具体的に考えている
人生設計をきちんと立てて，今後の生活を送っていきたいと考えている
私は，目標を達成しようとがんばっている
今後，どんな風に生活していくか考えている
第 3 因子「自律性」
私は，決断する力が弱い*
私は，自分の判断に自信がない*
私は，誰か他の人がアイデアをだしてくれることをあてにしている*
私は，物事を完成させるのが苦手である *
何かしたあとで，それが正しかったかどうか心配になることが多い*

付録 2

関係性に基づくアイデンティティ尺度
第 1 因子「自己を取り巻く世界への信頼感と関係性の価値付け」
周囲の人々によって自分が支えられていると感じる
これまで私が築いてきた人間関係は，私にとって価値のあるものである
私は人間関係を大事にしており，それによって多くのものを得ている
私がこれまでに関わりをもった人々は，私によい影響を与えてくれた
自分が困ったときには，周りの人々からの援助が期待できる
友人関係は，比較的安定していると思う
第 2 因子「見捨てられ不安」
私は人から見捨てられたのではないかと心配になることがある*
私は時々，周囲の人から取り残されて，一人ぼっちであるように感じる*
私は批判に対して敏感で傷つきやすい*
第 3 因子「関係の中での自己の定位」
人との集まりで他の人が私の考えに同意しないのではないかと思うと，自分の意見を主張するのにためらいを覚える*
他者と一緒に何か物事を行うとき，私はよく受身的になってしまう*
集団内で，私はちゅうちょすることなく，自ら正しいと思うことを表明できる